

内容の要旨

本論文は古代における日中仏教交流に関連して、中国における「皇帝菩薩」理念の創出および日本への影響、「皇帝菩薩」思想について日本は中国からどのような影響を受けたのか、また両国皇帝の中でも崇仏で有名な梁武帝と聖武天皇の受菩薩戒について考察するものである。聖武天皇の「皇帝菩薩」は梁武帝から直接的に受容されだとは言えないが、中国の皇帝により提唱した「皇帝菩薩」思想が日本になにがしかの影響を与えたことが指摘できる。こうした観点から梁武帝と聖武天皇における「皇帝菩薩」の具体的な内容について考察した。

第一章は先行研究やデータに基づいて、中国における梁武帝の「皇帝菩薩」思想について概観し、まずは「皇帝菩薩」の理論背景、すなわち「沙門不敬王者論」と「皇帝は如来」思想について述べてきた。また、梁武帝が菩薩戒を受けるについて、梁武帝の即位、梁武帝が受菩薩戒と捨身講経、仏寺の建立、僧侶の礼遇や経典の編纂について「皇帝菩薩」思想との関連性から考察した。梁武帝は北朝の「皇帝則如来」思想に沿って、政教統合の理念である「皇帝菩薩」を創出した。河上麻由子氏は、武帝が当時の国際社会において崇仏の皇帝として高名であったとする。その政教理念は日本（倭国）へも百済を介して影響を与えた。

第二章においては、中国の「皇帝菩薩」に関する研究を踏まえて、日本における聖武天皇と「皇帝菩薩」の関連について考察してみた。聖武天皇により国分寺を建立した。建立の背景には日本中で起こったさまざまな災災害、具体的には地震、凶作、伝染病、そして、貴族による反乱があった。こうした事態のなか聖武天皇は「仏教」に救済を求め、中国の歴代皇帝の全国的寺院建立にならって国分寺を建立したのである。そしてさらに、聖武天皇の出家、大仏開眼供養などを中心に考察を加えた。聖武天皇の出家を考察する際に、菩薩戒を受けた時期、聖武天皇の戒師について論じた。天平勝宝4年（752年）に東大寺大仏の開眼供養会が開かれ、上皇の聖武天皇と娘の称徳天皇とが一緒に隣席したことは、政教統合の理念を示したものと考えられる。『東大寺要録』に引かれる鑑真の弟子・思託の『延暦僧録』逸文には聖武天皇を「聖武皇帝菩薩」と称しており。これは渡来僧を介して日本に中国の「皇帝菩薩」の思想が伝わったことを立証するものと考えられる。